

ユネスコスクール指導者研修会 実践事例発表



1

「探究科」を探究する

自己紹介

- ・愛知県立刈谷北高等学校
国際探究科主任
- ・主任になった経緯



「探究」の素人が主任になり、駆け抜けながらも新しい
取り組みを取り入れた1年間の実践を紹介する

2

もともと出来ていた流れ

- 1年 探究基礎 地元の企業・団体との連携
- 2年 探究実践 個人の興味のある内容を探究する
- 3年 振り返り 日本語・英語論文にまとめる

昨年の所属学年は1年、探究の授業は2年に入った

3

探究基礎(1年)

地元の企業・団体と連携

→夏休みに連携先の課題を聞いてくる

それに対して、

「調べる」「問いを立てる」「仮説を考える」

「調べる」→愛知県図書館「情報検索講座」を活用する

4

探究の充実にはインプットが大切

- 5月 多文化共生講座 (1・2年合同)
- 6月 国際理解講座 (1・2年合同)
- 7月 1日異文化体験 (1年)
- 10月 国際理解講演 (学校全体)
- 1月 国際理解講座 (1年)

1クラス学科のため、学年の垣根を少なくすることを意識

5

意欲の高い生徒に早くから発表を

リジェネラティブクエスト

- ・外部に出ていく「きっかけ」に
- ・Earth Company社と共同開発
- ・短期完成型の
「地域探究プロジェクト」

最終日は、「刈谷市まちづくり推進課」の方を招いて発表した



6

刈谷市との関係



- ・市民協働課
国際交流協会 文化観光課
- ・まちづくり推進課
- ・子育て推進課
- ・アジア・アジアパラ競技大会推進室 など

関係をもつことで、いろいろな提案が来るようになる

7

探究実践(2年)

- 1学期 テーマ・問いの設定 「国際」要素を入れる
- 夏 外部インタビュー・実験など 課題①
- 2学期 仮説を考える
- 12月 校内発表
- 3学期 ブラッシュアップ
- 3月 公開発表 課題②

8

課題①

- 外部に出ようとしても断られてしまう
→ 昨年、メールの返信率1/3くらい
- 先進的な学校への出張
→ 名古屋市立菊里高等学校の例
→ 長野県立伊那北高等学校の例

探究に協力してくれる人材のリスト化ができないか…

9

課題②

- アンケートをとりたい！（定量調査）
→ SNSは信憑性に課題がある
→ でも、校内だけでは票数が少ない

近隣の学校で連携するシステムを構築しよう。

10

発表機会を増やす（全員で）

5月	連携先紹介	（2年→1年）
5月	昨年の探究内容紹介	（3年→1年）
9月	夏の成果発表	（2年→1年）
12月	校内発表	（2年）
3月	公開発表	（1年・2年）

11

発表機会を増やす（希望者）

- 8月 国際探究科説明会
- 9月 文化祭での発表企画
- 10月 中学生体験入学
- 11月 姉妹校との交流（1年）
【昨年行った外部発表】
→ BAAC/子供若者未来会議/コンソーシアム愛知



12

国際探究科の「強み」はどこか？

ユネスコスクールの活動に積極的にチャレンジ

- アートマイル国際協働学習
- BAAC
- 模擬国連
- コンソーシアム愛知での発表

「国際」探究科だからこそ、強みの英語力を活かす
発表場所として、外部への英語発表へのチャレンジを勧める。

13

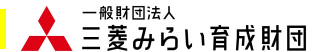
振り返り(3年)

1 学期 日本語論文 伝える力をつける

2 学期 英語論文 英語の授業と連携

振り返りに留まらず、後輩への「伝承」を意識

将来的に普通科へのメンターまでを想定



14

ご清聴ありがとうございました。

- 調べ学習に終わらない「探究」を実現したい。
- 特定の教員だけでなく、だれでも指導ができる仕組みを作りたい。

→地域とつながり、地域の人材とともに生徒を育てる。

学校と地域が協働することで、持続可能な「探究」へ

15